

(1) 総合評価は、評価基準の各項目ごとに委員会にてA,B,Cの3段階で評価した。

(2) 評価は、以下の4段階とする。

- S … 優れている
- A … 概ね適正に行われている
- B … 改善を要する
- C … できていない

No.	基準項目	評価項目(大)	評価項目(小)	取組内容	自己評価の理由	自己評価	選定委員会評価
1	市民の平等な利用の確保	1 施設の設置目的および市の管理運営方針	1 施設の設置目的を理解して運営できたか	<p>■『青少年の健全育成、交流の場の提供』を念頭に、老若男女幅広い世代の方が積極的に交流を図れるよう、また豊かな自然環境に囲まれた施設の特徴を最大限に発揮できるよう管理運営に臨み、自然の家が市民等の福祉の増進と、文化的な市民生活の確保を手助けする拠点施設となるよう努めた。</p>	<p>■環境整備活動を継続し、ビオトープの再生、ホタルの保全、彦根市の花である花しょうぶ植栽、絶滅危惧種ヤマトサンショウウオ保護など、自然体験施設としての立場を認識した取組みを行った。</p> <p>■『森に親しむ荒神山ウォークラリー』、『河川と触れあう宇曾川リバーポート』に、ビオトープ、ヤマトサンショウウオ、ホタルなどの生態系観察を付加した新たな学習プログラムを創出し、集団宿泊、活動を通じて、生徒・児童一人ひとりが他者との関わりや他者への思いやりを持つ自立的行動が習得できるよう、環境教育、生活指導、体験活動歴のあるものを多数採用し、団体への教育的サポート体制を充実させた。</p> <p>■『陶芸』事業の開催により、市民等の文化・芸術レベルの向上を図った。</p> <p>■幅広い世代が交流するコミュニティ形成のために、市民等が誰でも平等に参加できる自主事業を演出した。</p> <p>■イベントでの世代間交流だけでなく、施設の設置掲示板で各種団体チラシを積極的に掲示・配布し、利用者間交流を促進した。</p>	A	A
			2 市が示した管理運営方針と実施内容が合致するか	<p>■仕様書に基づいて、①市民等の平等利用確保、②施設効用の発揮、③安定的、効率的な管理運営(人材確保、利用者及び地域住民の安心安全確保、意見反映)、④情報公開および個人情報保護 の4つを基本方針として管理運営に臨んだ。</p>	<p>■公平性を欠くことのないよう「誰でも、どこでも、いつでも」確認できるように、ホームページ上の予約状況をリアルタイムで更新し、条例及び規則の規定による諸手続きを執ることで、市民等の平等な利用を確保した。</p> <p>■施設環境(山、川などの大自然)に適した事業、施設設備(PA器具、遊具など)を活かした事業を展開した。</p> <p>■仕様書に規定されている資格や経験を満たすことはもちろん、教育施設であることを考慮して教員資格を所持者し、自然の家の勤務経験を持つものを4名配置し、安定的な運営をした。</p> <p>■利用者の声を管理・運営に反映させるために、利用者個々にアンケートを聴取した。そして、その結果を一個人の利益とならないよう、管理運営に反映した。</p> <p>■個人情報保護法の観点から個人情報管理責任者を選定し、情報管理を徹底した。</p>	A	A
			3 指定管理者(団体)の運営や経営のモラルは適切か	<p>■荒神山公園、子どもセンターなど複数施設の指定管理者として培ったノウハウを活かし、管理運営を行った。</p>	<p>■金亀公園・荒神山公園・庄塚公園(バラ園・ハーブ園・しょうぶ園のみ)、子どもセンター、ふれあいの館の指定管理者としての実績を活かし、中でも公園管理においては15年目と長期継続的な指定管理の経験を有し、その経験から管理運営上の問題点を所管課に提起し、改善を要望した。必要に応じて協議のための運営会議の場を設定した。</p>	A	A
	2 平等な利用を図るための具体的な手法およびその効果	1 事業等の実施内容に偏りがなかったか	<p>■社会教育、自然環境保全、野外活動体験、宿泊研修施設としてだけでなく、市民等の交流の場であり、地域社会の一員でもある自然の家の存在意義を十分に理解した上で、取り組みを行った。</p>	<p>■社会教育施設として ・ボランティア(活動支援スタッフ)の育成及び養成 ・将来のリーダー発掘 ・やまのこ森林体験学習 ・インターンシップ、職場体験受入れ</p> <p>■自然体験施設として ・環境整備活動 ・ビオトープの再生 ・生息生物の保護活動(ホタル、ヤマトサンショウウオなど)</p> <p>■野外体験活動施設として ・野外活動(ウォークラリー、リバーポート、プロジェクトアドベンチャー、キャンプ、キャンプファイヤー) ・自主事業(荒神っ子クラブ、基礎から学ぶ山登り、作陶体験教室、ファミリーキャンプなど全12事業)</p> <p>■地域社会の一員として ・荒神山ファンクラブ加入 ・石山総山環境整備活動 ・連携(彦根ネイチャーC、荒神山神社、千手寺、日夏財産区) ・協力(荒神山公園、子どもセンター)</p>	A	A	
			2 生活弱者や社会的弱者への配慮がなされていたか	<p>■優しい日本語やピクトサインなどの手法を継続的に取り入れ、必要に応じて更新、追加した。</p> <p>■利用者の公平性を欠くことのないよう職員が規約や条例を遵守し、人権問題への意識向上を図るために『人権研修』を実施した。</p> <p>■仕様書に則って、『落書き点検』を実施した。</p> <p>■特別支援教育経験者を配置し、対象の団体利用時には細部まで支援が行きわたるよう配慮した。</p>	<p>■ピクトサインの視覚的な図の表現は、言葉の制約を受けない情報伝達を、優しい日本語表記は快適な施設利用を可能にした。また、玄関スロープ、エレベーターが常時稼働できるよう、日常管理、動作点検を実施した。</p> <p>■年2回の『人権研修』では、LGBT、障害者、外国人等の人権問題を扱い、職員の人権に対する意識の高揚と理解を図った。</p> <p>■『落書き点検』においては、仕様書に従って月1回の報告としたが、毎日の点検を実施し、人種、宗教、国籍などに限らず悪意あるものは早期に教育委員会に報告するよう努めた。(R2年度の落書きは0件)</p>	A	A
		1 年間の広報の内容は適切か	<p>■施設紹介、実施事業案内において、ホームページやFacebookからの情報発信はもちろん、広報誌、新聞、テレビなどメディア媒体を活用した。ホームページでは、動画などの視覚的効果も取り入れて活動や過去のイベントの様子を掲載し、内容も充実させた。</p>	<p>■以下の放送、記事掲載があった。 「中日新聞」ウォークラリーコース、施設紹介 「ZTV」『作陶体験教室』参加者募集と活動紹介 『陶芸&コケ玉』参加者募集と活動紹介 「広報ひこね」『作陶体験教室』参加者募集 『陶芸&コケ玉』参加者募集 「彦根市子ども会指導者連合会」キャンプ活動紹介</p>	A	A	
2 施設の効用の最大限の発揮	1 利用者の増加を図るための具体的な手法およびその効果	2 利用拡大の取組内容は適切か。また、利用増に繋がっているか	<p>■コロナ禍を原因とする休館措置、宿泊利用のキャンセルが相次ぐ中、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策の徹底、実施可能な活動プログラムや日帰りへの切替を提案することで、施設利用に繋がった。</p> <p>■利用者拡大のため、市内外の団体誘致計画を立案した。特に、稼働率の低い場所は、活動目的に応じた団体ニーズを探った。一方でリピーターに対してはイベント開催チラシを郵送し、継続利用してもらえるよう努めた。満足度の獲得によるリピーターからの紹介を促し、新規顧客獲得を狙った。</p> <p>■H30年度を最後に撤去された自動販売機を、要望に応え再設置した。</p>	<p>■コロナ禍でも安心安全にご利用頂くために、マスク着用、消毒、利用人数制限、ベッド間のついたて設置など、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策を徹底した。</p> <p>■営業活動により、市内外学校団体の誘致に成功した。新型コロナウイルス感染症拡大予防対策の徹底、2段ベットや布団の更新、研修棟や指導棟の整備を積極的にPRし、新規団体の宿泊予約を取り付けた。</p> <p>■新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、訪問できなかった団体に対しては、開催イベントの案内、コロナ対策、その団体の利用実績がないアクティビティを実演したDVDを送付するなど、リピーターの確保に努めた。</p>	A	A	
		3 地域、関係機関、ボランティア等との連携が図られていたか	<p>■近隣施設や地域集団と交流を図り、相互の事業参加など地域コミュニティとの連携をとった。</p> <p>■情報をリアルタイムで共有し、意思疎通や共通理解を図った。</p>	<p>■近隣施設の「荒神山公園」、「子どもセンター」と連携を図るために、自然の家が主体となって3施設会議を開催した。施設間の問題点を解消し、今後のイベント協力や情報の共有を約束した。</p> <p>■荒神山を拠点に滋賀県立大学や市民活動団体等が連携して、地域づくり活動を推進する団体「荒神山ファンクラブ」に参画した。</p> <p>■「山王会」の月1回の『石寺総山整備活動』に参加し、地域の活性化に尽力した。</p> <p>■「荒神山神社」、「千手寺」、「日夏財産区」と協議し、今後の協力体制を確認し、ウォークラリーコースの通行許可の承認を得た。</p>	A	A	

No.	基準項目	評価項目(大)	評価項目(小)	取組内容	自己評価の理由	自己評価	選定委員会評価	
		2	サービスの向上を図るための具体的手法およびその効果	1 サービス向上のための取組内容(アンケート調査や苦情処理の対応など)は	<ul style="list-style-type: none"> ■正確なニーズを把握するため、今年度より団体代表者に加えてアンケート聴取範囲を利用者個々に拡張した。それを分析し、所内会議にて必要対応を検討し、対処した。利用者への要望には出来る限り対応することを基本としたが、安全性に関する事項や特定の利用者への配慮となってしまう恐れのある事項に関しては十分に留意し、「公平・公正なサービスの提供」を第一に、利用者の理解を得られるよう、慎重に対応を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ■利用者個々のアンケート「クラブ創作活動の際の説明を児童の実態に即して短くしてほしい」という要望に対しては、内容を精査した上、利用者個々に即した対応になるよう改善した。「カレーを子ども用にもう少し甘口にしてほしい」という要望については食堂運営業者と協議して、万人受けするよう適正な辛さに調整するなど、対処できる問題はすぐに改善した。食事に関わる意見、要望については食堂運営業者に提供し、月1回の定例調整会議以外にも、随時協議を行い改善を図った。 ■苦情は0件であった。(様式9参照) 	A	A
				2 指定管理者が事業計画書に記載した項目に対する実施内容は適切か	<ul style="list-style-type: none"> ■事業計画書および収支計画に則った管理運営を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ■昨年度の2階部分に続いて、経年劣化が激しい3階の2段ベッドと布団の更新を、冬季利用促進のための『作陶体験教室』を計画書通り実行した。安全面の問題から、消毒効果のあるオゾン発生器は、教育委員会の承認を得た上で購入した。 	A	A
				3 自主事業は、市の意図している内容となっていたか	<ul style="list-style-type: none"> ■市民等が広く参加できる、設置目的に沿った自然体験活動等を主軸とした独自イベントを構成した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■小学生を対象とした『荒神っ子クラブ』、『チャレンジキャンプ』、中学生を対象とした『良きリーダーへの道』、一般の方を対象とした『基礎から学ぶ山登り』、『陶芸&コケ玉講座』、家族を対象とした『ファミリーキャンプ体験会』、子どもから大人を対象とした『作陶体験教室』など、多くの方が施設を利用できるよう、また自然の家が世代間の交流の拠点となるよう、活動内容や参加対象を変えた種々のイベントを企画した。 	A	A
				4 全体的に施設の機能を活用した内容になっていたか	<ul style="list-style-type: none"> ■荒神山や宇曾川などの大自然を臨んだ立地環境、野外活動や野外炊事などの体験活動を行い、集団宿泊や研修ができる施設環境、施設機能の効果を最大限に発揮できるよう、事業展開に努めた。利用がない設備については対策を講じて、利用促進に繋げた。 	<ul style="list-style-type: none"> ■立地環境を活かした荒神山のウォークラリーや宇曾川のリバーボート活動、施設環境を活かしたキャンプやクラブ創作活動、プロジェクトアドベンチャーなどの活動を始めとして、施設の代名詞ともいえる豊かな緑、新鮮な空気を肌で感じることもできる、野外体験活動を実施した。 ■希少価値が高いが、使用頻度が低い陶芸の『穴窯』利用を促進させるため、荒神山の粘土を用いた『陶芸』事業化を目指し、第一段階として自主事業『作陶体験教室』を開催した。 ■稼働率の低い研修棟や指導棟は必要な整備を施し、研修棟1階は電動ろくろを用いた作陶体験、2階は手回しろくろを用いた手ひねり成型の場として稼働させた。指導棟においては、新たな次年度自主事業の開催場所、利用団体主催事業の実施場所として申込予約をいただいた。 	A	A
2	施設の効用の最大限の発揮	3	施設の維持管理内容、適格性および改善の可能性	1 市の意図している内容が事業実施されていたか	<ul style="list-style-type: none"> ■子どもたちにとってかけがえのない体験学習の場、市民等が交流を深める場になるよう事業展開を図り、設置目的の達成を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> ■活動支援スタッフの育成と養成のための『スキルアップ講座』、『事前模擬イベント』や、団体の自主プログラムに適切なアドバイスをし、その活動を通じ、指導者としての模範的な姿を示すことで、青少年指導者育成に寄与した。 ■集団活動や集団宿泊を通じて、生徒・児童一人ひとりが集団の中における協調性や自立性を学ぶ手助けとなれるよう、自然体験を中心とした活動プログラムを提供した。 ■市民等の交流の場となるよう、幅広い世代が参加できる全12種の独自イベントを企画した。 	A	A
				2 施設管理、安全管理は適切な内容であったか(獣害対策も含む)	<ul style="list-style-type: none"> ■新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、利用者の安全を確保するため予防対策マニュアルを作成し、運用した。 ■『利用者の安全』を第一に、危険箇所での早期発見に努め、早急に彦根市に報告し、必要な策を講じた。 ■共同体が指定管理者として長期にわたって蓄積した、イノシシ対策のノウハウを活用した。 ■彦根市消防南分署と連携を図り、事故や災害発生時の経路、救助方法を確認し、現場へいち早く到着できる体制を構築した。 ■有事に備えて、施設利用者傷害保険、施設賠償保険に加入した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■利用者の危険となるスズメバチの巣を、日常のウォークラリー巡回点検により早期発見し、直ちに教育委員会に報告するとともに利用者への注意喚起、視認できるよう処置を講じた。 ■宿泊、日帰りに関わらず利用団体には事前の検温を要請して、37.5度以上もしくは体調不良の場合には、来所を自粛してもらうよう事前打合せにて確認した。利用団体はもちろん来所者全員に対して、検温の実施、手指消毒を徹底し、更に施設内においては、換気、物品消毒、対面受付、食堂の亚克力板設置、宿泊室の人数制限や仕切り設置、脱衣所や団体の集合場所となる集会所や学習室にオゾン発生器を常備するなど、可能な限りの対策を講じた。 ■必要に応じて監視カメラで警戒し、昨年度のワイヤーメッシュの設置や嵩上げなどのイノシシ侵入防止対策が功を奏し、今年度の被害は報告されていない。 ■昨年度に引き続き事故は0件であった。 	A	A
				3 維持管理は効率的な内容になっていたか	<ul style="list-style-type: none"> ■昨年度からの業者を引き続き採用することで、安定的な管理・運営を行った。業務の効率化や経費縮減の観点から、新業者の採用も検討した。(尚、新業者選定の際は、利用者の安全面を考慮し、緊急時の対応も考慮に入れた。) 	<ul style="list-style-type: none"> ■もともと自然の家に入りしていた業者を採用することで、継続的な管理を可能にした。また、緑地維持管理業務においては共同体の構成員である専門の樹高木造園が専属で入ること、緊急的な危険木伐採など、年間を通して効率的な管理を実現した。 ■業務の見直しを図り、当直業務においては新たな業者を選任し、仕様書を満たす範囲内で効率化を行い、経費の縮減を図った。 	A	A
				4 食堂の運営は適切になされているか(衛生面、利便性)	<ul style="list-style-type: none"> ■新たに食堂運営業者を選定した。 ■日常衛生管理点検により、用具管理、食材管理、衛生管理を徹底し、『安心・安全な食』の提供を前提として新メニューの提供を実現した。 ■新型コロナウイルス感染症予防対策を講じた。 ■食中毒のリスク軽減のためにプラスチック(急速冷却機)を活用し、利用者に安全な食を提供した。 ■製氷機を導入した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■学校の食堂運営経験がある業者と業務委託契約を締結し、この変更を契機とし、メニューについて利用者の声を反映させることはもちろん栄養のバランスについても再度検討し、管理栄養士が考案した新メニューの提供を開始した。 ■日常衛生管理点検で、食堂の衛生状態を維持した。食堂運営業務従事者に対して年1回以上の健康診断、月1回以上の検便を実施した。 ■新型コロナウイルス感染症予防対策マニュアルを作成し、収容人数の制限、対面や隣接を避けた座席配置、換気、物品消毒に加えて、各テーブルへの亚克力板設置した上で黙食を推奨した。 ■夏季期間、施設を利用する子どもたちに冷たい飲み物を提供することができるだけでなく、アイシングが利用できる施設として、荒神山公園を利用するスポーツ団体を誘致した。 	A	A
3	施設の管理費用の縮減	1	施設の管理	1 管理業務経費の縮減についての取組がなされているか	<ul style="list-style-type: none"> ■職員による日常点検で、異常個所の早期発見に努めた。 ■できる限り、自力での施設修繕に尽力した。 ■ポスターを掲示し、利用者に水道の閉め忘れ、電気の消し忘れの注意喚起を働きかけた。また、当日の利用状況を把握し、満足度の低下に繋がらない範囲で、一人ひとりが省エネ対策として節電・節水に取り組んだ。 ■人力警備と機械警備を併用し、効率的な管理を行った。 ■自然と共存共栄を目指すグリーンリサイクルに取り組んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ■異常個所の早期発見で大がかりな修繕を予防し、修繕費用の増大を抑制した。 ■看板の修繕や壁紙の補修など可能なことは職員で実施したことにより、最小限の費用に留めることができた。 ■利用者の減少もあるが、日々の省エネ対策により、電気代、水道代は共に昨年度と比較して使用量の削減を達成した。 ■宿泊のある時以外の人力警備を減らし、機械警備を設定した。休館日以外は毎日入っていた清掃についても、宿泊のある日とその翌日のみにしたり、部屋の稼働率に応じた無駄のない清掃を変更した。 ■樹木の枝葉や落ち葉等は廃棄せず、破碎し発酵させてリサイクル堆肥を生成した。植栽した苗木のマルチング材、花壇の土壌改良剤に利用した。 	A	A

No.	基準項目	評価項目(大)	評価項目(小)	取組内容	自己評価の理由	自己評価	選定委員会評価	
4	管理を安定して行うこと ができる経営規模や 経営能力	1	安定的な管理運営が 可能となる人的能力	1 職員の体制は十分な内容となっているか	<ul style="list-style-type: none"> ■中学校の管理職経験と自然の家勤務経験を有する所長1名が全体を管理する現場統括責任者となり、その補佐役としてそれぞれ施設管理業務責任者、運営業務責任者である副所長を2名配置し、その下に経理事務2名、やまのこ指導員2名、活動支援者1名の8名体制をとった。 ■新規事業『陶芸』を開催するために、陶芸指導経験を有するものを雇った。 ■各職員が複数の役割を担うマルチスタッフ化を推奨した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■予約の多いゴールデンウィークや学校の夏季休暇、やまのこ事業などで団体の受け入れが多い繁忙期と、利用が比較的少ない閑散期を考慮した勤務体制及び勤務シフト作成により、効率的に運営を行った。また、関係団体や共同体がいつでも駆けつけられるよう『安全管理マニュアル』を作成し、有事に備えた。 ■主要業務の他に、各利用団体や各自主事業に対して、正副担当者割り振り、一定の責任を持たせることで、職員は多方面の業務履行スキルを獲得した。 	A	A
				2 職員の雇用、その確保の方策は適切か	<ul style="list-style-type: none"> ■仕様書で提示された資格要件を満たすことはもちろん、職員の継続雇用を推奨した。 ■新規職員については、ハローワークやIndeedなどの求人掲載と並行し、共同体が築いたネットワークを駆使し、自然の家の勤務経験者や関係団体からの紹介者を募った。 	<ul style="list-style-type: none"> ■自然の家の勤務経験を持った職員を多数採用したことで、円滑に業務を遂行することができた。 ■随時それぞれが培ったノウハウを交流することで、未知の分野に対するスキル習得、ブラッシュアップを図った。 	A	A
				3 職員の指導・育成や研修体制は適切か	<ul style="list-style-type: none"> ■年間計画に基づいた研修の実施、講習の参加により、適正な人材育成を図った。 ■習得した技術や手順を所員で共有するとともに、安全管理を意識して作業に従事させた。 	<ul style="list-style-type: none"> ■下記の研修を実施した。 ■新職員2名:『新人研修』 ■全職員8名:『人権研修』、『接客マナー研修』、『救急救命研修』 ■『不審者対応研修』、『ヒヤリハット研修』、『避難訓練研修』 ■『コンプライアンス教育研修』 ■下記の講習に参加させた。 ■『防火管理者講習』、『ATS(設備安全管理者)講習』 ■『PAJ(プロジェクトアドベンチャーファシリテーター)講習』 ■『農業アドバイザー』、『刈払機取扱作業教育』 ■『伐木等の業務に係る特別教育』 ■研修、講習で学んだノウハウを伝授することにより、その内容の定着を図った。 	A	A
				4 活動支援スタッフの募集および育成がなされているか	<ul style="list-style-type: none"> ■令和元年度に登録した支援スタッフに対しては、グループLINEを用いた連絡体制を活かし、早期に継続の確認をした。公民館、近隣大学、関係機関へ応募チラシの設置、ポスターの掲示、広報ひこねへの募集記事掲載により新規スタッフの獲得を目指した。 ■指導マニュアルに基づいて、OJTによる必須情報や基礎能力を獲得し、本番により近い形で自主事業を模擬開催し、現場での適切な役割や立回りを身に付け、更に活動支援スタッフと職員とのチームワークを育んだ。更に、今年度は自然体験活動の技術習得、向上を目的とした「スキルアップ講座」を企画し、その活動を通じていずれは青少年指導者として地域で活躍できる人材養成を目標とした。 	<ul style="list-style-type: none"> ■市の方針に従い、年内の自主事業の開催はなかったため、活動支援スタッフへの募集も自粛したが、既存支援スタッフの意向調査を実施し、次年度の続行を取り付けた。予定していた自主事業の要綱、活動マニュアルを定期配信やOJT研修の定期開催により、意識や技術の低下に繋がらないよう考慮した。 ■スタッフ間交流を推進し、仲間意識の芽生え、一体感の高揚を図るために、仲間づくり体験活動を取り入れた。 	A	A
5	適切な事業の取組	1	安定的な管理運営が 可能となる経済的基 盤	1 団体の財務状況は良好か	<ul style="list-style-type: none"> ■母体となる(株)高木造園、(株)技研サービスの堅実かつ優良な経営により蓄積されたノウハウを生かし、収支計画表に基づいた堅実な経営を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ■昨今のコロナ禍にあっても、共同体構成員である(株)高木造園、(株)技研サービスは共に黒字決算であり、安定した経営を実現した。 	A	A
				1 自主事業は、利用者ニーズを満たす内容であったか	<ul style="list-style-type: none"> ■参加者アンケートを精査し、満足度が高かった企画は回数を増やし、要望の多かったものについては新規自主事業として立ち上げた。(昨年度全7事業だったものを、今年度は全12事業に増加させた。) ■『プロジェクトアドベンチャー』、『野外炊事』、『キャンプ』『リバーポート』、『ウォークラリー』、『ナイトハイク』など、利用者ニーズに応じたものを選択し、様々な年齢層の方が参加できるよう自主事業を計画した。『星空教室』、『ペットボトルロケット』、『鮎の掴み取り』など、彦根市所管時のアンケートも参考に施設環境を活かした企画も考案していった。 	<ul style="list-style-type: none"> ■下記の自主事業を増加させた。 ・ファミリーキャンプ体験会 ・支援スタッフスキルアップ講座 ・良きリーダーへの道in荒神山 ・基礎から学ぶ山登り講座 ・作陶体験教室 ■新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、市の方針に従って年内自主事業の開催を見送ったが、1、2月には予防対策を実施した上で、新規事業として陶芸指導経験を持つ職員による『手びねり成型』や『絵付け』を実施した。また、アンケート要望に応じて、3月には昨年度新型コロナウイルス感染症拡大の影響で実施できなかった『陶芸&コケ玉』を開催した。 	A	A
5	1	荒神山自然の家の特色を生かした取組	2 青少年健全育成(やまのこ事業等)に関する取組の内容は適切であったか	<ul style="list-style-type: none"> ■やまのこ専任指導員2名以外にも、教員免許を所持し、かつ豊富な生徒指導経験を有する副所長を全体の管理責任者とすることで、学校教育的な側面にも配慮した。 ■小学4年生を対象としたやまのこ事業は、森林への理解と関心を深めることを目的として、森に親しむ『やまのこウォークラリー』、森づくり体験『丸太切り』、森の恵みを利用した『焼き杉クラフト』、森のレクチャー『森林保水実験』によって成り立っている。自然の家ではこれに加えて、小学5年生の『うみのこ事業』実施を考慮し、施設環境を活かした『リバーポート』活動を導入している。今年度は降雨時の学習プログラム重複をなくすため、木粉を用いた『木粘土工作』体験の導入を検討した。 ■新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、来所が出来なくなった学校団体に別方法でのやまのこ事業実施を提案した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■やまのこ事業に参加予定の学校団体に対して、『やまのこ合同説明会』を開催し、学習プログラムを説明するだけでなく、実際に施設、活動場所を案内することで、当日のイメージをわかせるように配慮した。 ■学校団体が作成した活動計画に対して、指導員の専門的な見地から適切な支援、助言、指導を行い、円滑なプログラム進行を実現した。また、滋賀県や関連団体が主催する研修会に積極的に参加し、心構え、接遇、技術向上を図った。 ■本来のやまのこ事業は、実際に荒神山を散策する『やまのこウォークラリー』を行うが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で来所が困難な学校に対しては、実際の活動映像を記録したやまのこDVD配布や、活動内容を凝縮した出前講座を指導員が学校に出向いて実施した。 	A	A	
			3 市民や事業者と協働で取り組む事業内容は適切であったか	<ul style="list-style-type: none"> ■当施設の発展や利用促進のみならず、近隣施設、市民団体へ相乗効果が生まれるよう、積極的に団体実施の事業や講座に協力した。 	<ul style="list-style-type: none"> ■近隣施設の「荒神山公園」、「子どもセンター」、市民団体の「山王会」、「荒神山ファンクラブ」協力のもと環境整備活動を行い、一方で、「山王会」の月1回の『石寺総山整備活動』に参加し、コミュニティの一員として地域活性化に貢献した。 ■毎年施設利用のある学校長、彦根市子ども会連合会、自然の家元所長や荒神山ファンクラブ代表、荒神山神社神主など市民等を委員に選出し、共同体主催の『自然の家運営委員会』を計画した。今年度の運営委員会はコロナ禍の状況下であることを考慮し、開催を中止したが、運営委員の方に活動実績資料を送付し、意見聴取を行った。地域における重要性を再認識し、提案に対しては各種会議で協議の上管理運営に反映した。 ■新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、「荒神山公園」主催の『荒神山公園春まり』、「子どもセンター」主催の『子どもフェスティバル』は中止となったが、荒神山公園とのワンストップ施設優先予約サービスや子どもセンター開催講座への協力で、施設PRや利用促進を図った。 ■市民団体「彦根ネイチャークラブ」と連携し、環境保護活動の一環として、絶滅危惧種ヤマトサンショウウオの産卵場所に適した池を造成した。今後、生体の育成記録など資料提供を行う。 	A	A	
			3 市民や事業者と協働で取り組む事業内容は適切であったか					

評価の理由、コメント	S	A	B	C
<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍のなかよくやられた。とても頑張られたことが伝わってきた。活動写真に日付が入っていればいいと思った。アンケートは、子どもの声をそのまま書かれたらどうか。何を書いているのかわからないのも、それはそれでよいのでは。全体的によくになっている。 ・出前講座を含め、これだけの活動をされたことに驚いている。活動写真にマスクをしていない子が写っているが、支障はなかったのか気になった。オオサンショウウオはもっと積極的に広報されてはどうかと思った。よい活動なので、広めてほしい。 ・オオサンショウウオの池やホタルは感嘆した。指定管理者の得意分野について存分に力を発揮していただけた。これからも頑張っていたきたい。 		25		